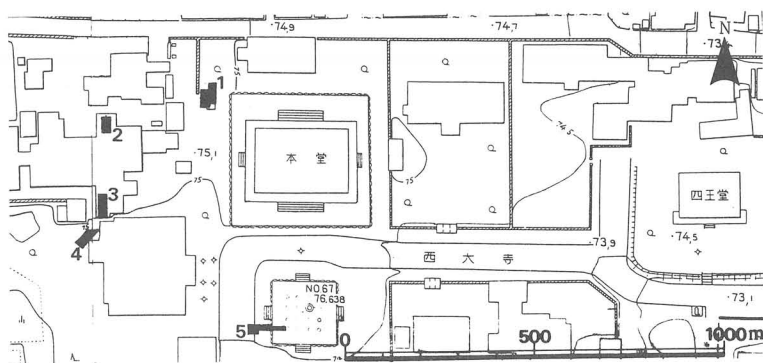


Ⅲ 京内寺院の調査

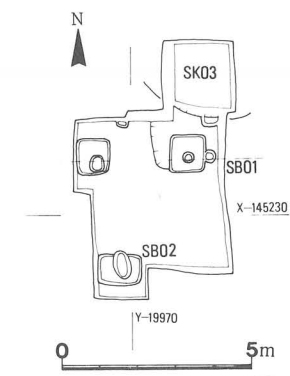
1 西大寺境内の調査

西大寺本坊の改築に先立つ事前調査を4ヶ所で行なった(第34図第1～4区)。第1区の北半は、近世の土拡で破壊されていたが、南半において表土下50cmの地山上で奈良時代の柱穴3基を検出した。いずれも建物か塀かは確認できないが、掘形は径約1mと比較的大きい。SB01は10尺等間の東西方向1間分を検出し、いずれも柱痕跡を残していた。SB02はSB01と柱筋を異にし、別の構造物と考えられる。SB02の柱は抜き取られていた。SB01・02はともに東西両塔の北側、伽藍中軸線付近にあるので、西大寺伽藍が整った神護景雲年間(767～770)以前ののものであろう。第2区では中世の土拡を検出したにとどまった。第3区下層では奈良時代の南北溝と土拡とを検出した。南北溝は西肩を確認しただけで規模は不明である。南北溝と土拡からは奈良時代中頃の土器が出土した。いずれも西大寺創建以前の宅地に関わる遺構であろう。南北溝は右京一条二坊十一坪の東西2分線の西約10mに位置する。第3区上層では室町時代の遺構を検出した。北端では整地盛土の上に石組東西溝が、南側では下層とほぼ同じ位置に南北溝が作られる。この南北溝からは円形の三彩極木先瓦が出土した。第4区では上層で江戸時代の池が検出され、下層では奈良時代の包含層が確認された。

第1トレンチの地山面は他のトレンチに比して、0.7～1.32m高く、寺造営以前には東から西に向って低くなる旧地形が考えられる。



第34図 西大寺境内発掘調査区位置図



第35図 西大寺1区遺構図

2 西大寺東塔基壇の調査

本調査は、西大寺が計画した東塔基壇外装の修理工事に際して行なった。西大寺の東西両塔については、昭和30年の大岡実・浅野清両氏の調査によって、当初八角七重に作る計画で工事を進め、途中で四角五重に変更したとする霊異記の記載が事実であることを確認している。しかし、計画変更前に八角形基壇の築成がどこまで進んでいたかは不明であった。そこで、東塔改修工事のため西階段の石とその南の基壇化粧石とが除去されたのを機に、階段の南2 mの位置に東西6 m・南北1.2 mのトレンチを設け、さらにトレンチを東に延長し、基壇を断ち割って、その築成の状況を精査した。

遺構と遺物 現地地表下0.5 mで塔造営時の地表面に至る。トレンチ西端部では、その下に奈良時代の整地土A・赤褐色バラス混り土の地山Bが続く。基壇の築成工程は大別して以下の(1)～(5)の段階にわかれる。

(1)旧地表面から深さ0.5 mの掘込地業を行なう。掘り込みの底は地山上面に一致し、掘り込みの肩は現基壇西端の西5 mの位置にある。底に径20 cmの河原石をまばらに置いた後、約0.5 mの厚さに版築を行なう。版築層は2～14 cmの厚さで、11～12層積み上げる。築土はやや軟弱で、築土の下半部は灰褐色土（築土C）、上半部は玉石・土器片・炭を多く含む黒灰色土（築土D）である。築土Dの上面はほぼ旧地表と一致し、最上層が掘込地業の外に若干はみ出す。築土Dの最下部で一点、最上部で2点銅銭が出土しているが、銭文不明である。

(2)続いて厚さ0.3 mの版築を行なう（築土E）。築土Eの及ぶ範囲は現基壇より広いが、西限は後世の攪乱により確認できなかった。しかし、掘込地業西端から内側1.3 mの範囲には築土Eは及んでおらず、(2)の作業は基壇の中心から外へ向けて行なったと考えられる。版築層は2～6 cmの厚さで、11～15層積みあげており、最上面には河原石が多く散在し石敷面をなす。各層は非常に硬くつき固めてあり、全面に突棒の跡が検出された。築土は暗茶褐色土で土器片を少量含み、各層の上面には酸化鉄が沈澱し、赤褐色を呈している。築土最上層下面で銅銭1点が出土したが、銭文不明である。

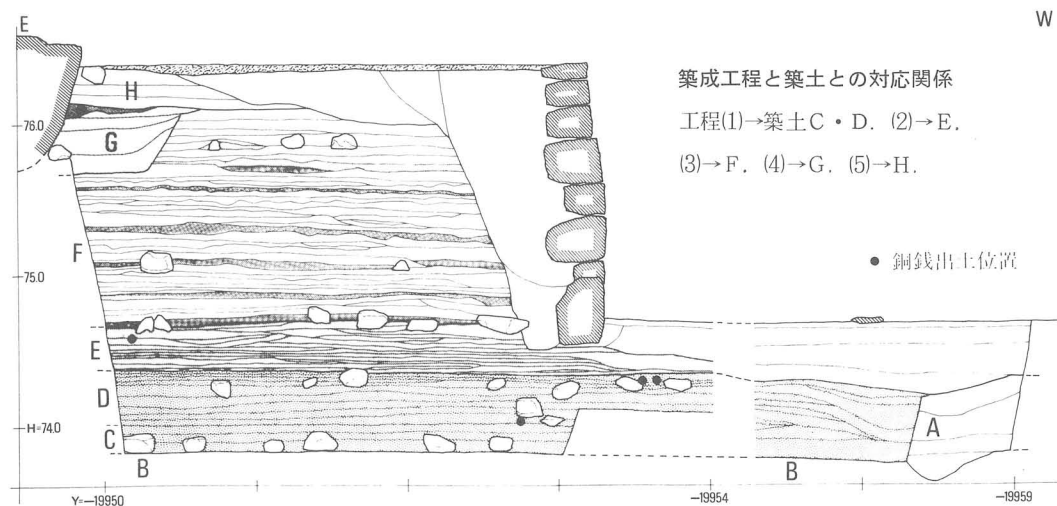
(3)さらに厚さ 1.4 mの版築を行なう（築土F）。築土Fは築土Eに比べてやや軟弱で色が白い。版築層は2～8 cmの厚さで、27～37層積み上げており、細かくみれば7小工程に分かれる。各小工程による築土は20cm程度で、小工程間には暗褐色の間層が入る。築土Fの上面より0.2 m下に玉石列を置く。

(4)深さ 0.4 mの礎石据付け穴Gを掘り、根固め石を置いて礎石を据えた後に、据付け穴を埋める。埋土最上部の濃茶褐色炭混り土の中から和銅開珎片が1点と土師器片および竈の破片が出土した。

(5)さらに版築による積み上げ（築土H）を行ない土壇部分の築成を完了する。なお、現基壇の化粧石は、裏込めに多量の瓦を用いており、その年代から地覆石が室町時代以降、それより上部は江戸時代末期以降に築かれたと考えられる。

まとめ 築土EとFとは積み方・色調ともかなり異なり、一連の作業によるものとは考えにくい。現段階の築土は基壇本体とは別の工事で、築土Eの上に乗る。以上から、工程(2)までを当初の八角形基壇築成の仕事と考える。

工程(3)以降が計画変更後の仕事であり、築土・礎石ともども創建時のものである。鎮壇具の投入は、計画変更前に最低3回、変更後も最低1回行なわれている。また、土師器片竈片の出土は鎮壇具の投入に際して、こうしたものを用いた行為が伴ったことを推測させる。



第36図 西大寺東塔基壇断面図

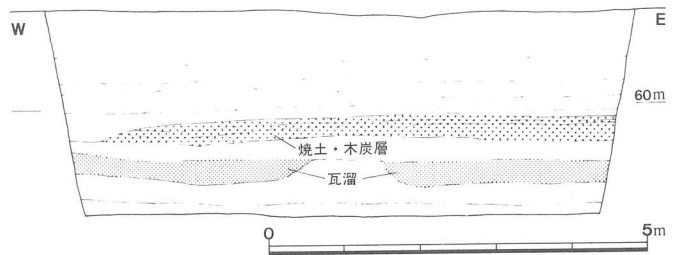
3 薬師寺南門付近の調査

薬師寺が計画した現南門周辺の環境整備にともなう事前調査である。調査地は、現南門の東西の築地塀復原予定地（第Ⅰ区）と、売札所移転地（第Ⅱ区）との2ヶ所である。

第Ⅰ区（第38図）は、創建南大門にあたるので、棟通りの礎石位置確認のため、現南門の東西に各 2.4 × 14m の調査区を設定した。創建時の門基壇は東西調査区ともに現築地塀の下ではよく残っていたが、周辺では削平されていた。棟通りの礎石位置に関しては、西側の調査区では植木の細根による攪乱のために、妻柱の根石を確認するにとどまった。東から5番目の柱位置では、礎石抜き取りに際し、根石も取り去ったと考えられる。一方、東側調査区では、礎石据付け痕跡を2ヶ所とも確認した。なお、現南門の棟通りの礎石は、新たに据え直した痕跡はなく、創建南大門の礎石を原位置のまま、西では西側を、東では東側を若干打欠いて再利用していることが判明した。したがって、創建南大門の規模は、中央3間が18尺、端間が東西ともに16尺であるという従来の調査成果が正しい。礎石の据付け方法は、現存礎石および東から1・2番目の礎石抜き取穴の断ち割りから、据付けのための掘形を掘削せず、基壇版築途上に根石で礎石を安定させ、さらに基壇版築を続行する工法をとっていることがわかった。築土は砂質土と粘質土との互層で、1層5～10cmの比較的粗い仕事である。また、築土中に創建瓦が若干含まれており、南大門の創建は薬師寺の造営が始まった養老2年（718）よりも若干遅れると考えられる。なお、『薬師寺縁起』では、仏門（南大門）は「5間2重戸3間壁2間、長5丈広3丈2尺」と記載されている。この寸法は天禄4年（973）火災以後の再建南大門の規模を記載したのではないかとする説もあるが、本調査ではそのような痕跡は確認できなかった。

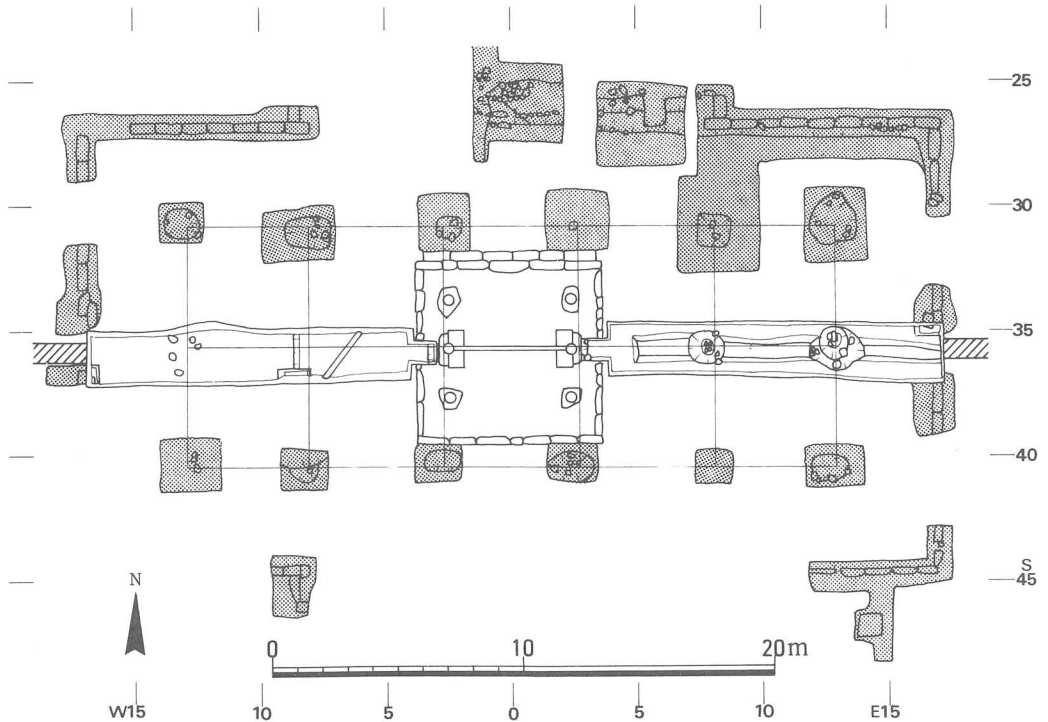
第Ⅱ区（第37図）は現南門を入った東側、回廊と築地とはさまれた場所で、宿直屋の存在も考えられたが確認できなかった。調査区では、現地表面から-2.7mで砂質の地山に達する。地山上20cmは植物質を含む池状の堆積で、薬師寺造営直前のこの地区の状態を示している。この堆積の中から、約20cmの角釘7本がま

とまって出土した。この堆積上に約60cmの盛土がある。薬師寺創建に際しての整地土であろう。この整地土を掘り込んで瓦溜が形成される。瓦溜からは軒瓦約300点をはじめとする多量の瓦埴類が出土した。それ以外に、加工のある凝灰岩片・三彩陶器片・土師器片が出土している。瓦溜形成後に、約30cmの盛土整地を行っている。この後に、木炭まじりの焼土層が堆積する。焼土層からは29点の軒瓦とともに、巡方帯金具を表わしたと思われる土製品が出土した。実際の巡方よりひとまわり大きく、金箔を押した痕跡も認められるので、朔像の帯の部分と考えられる。この焼土層は天禄火災後の整地によって形成されたものであろう。焼土層から上は、廃棄した瓦を主体とした整地層で順次現代まで至っている。



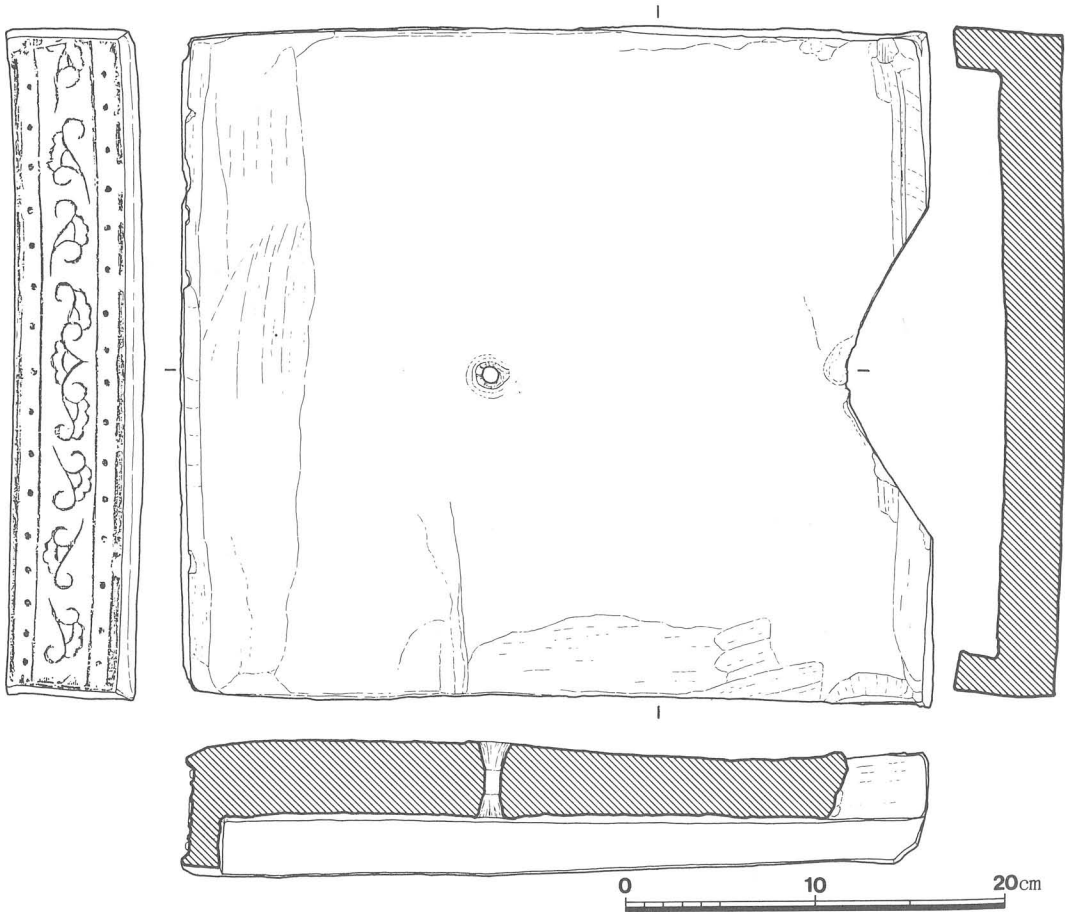
第37図 薬師寺南門東土層図（北壁）

瓦溜から出土した軒瓦は、



第38図 薬師寺南門調査遺構図（アミ部分は1954年調査）

約80%が創建時の本薬師寺式、約15%が平城宮系のもので、平安時代の復古瓦を若干量含む。道具瓦としては完形の隅木蓋瓦が出土している。おそらく、創建南大門の隅木を飾っていたものであろう。瓦溜から出土した土師器は10世紀後半代のものである。また、瓦溜から出土した多量の凝灰岩片は基壇化粧材と考えられ、10世紀後半代に薬師寺において屋根の葺替や基壇化粧の修築をはじめとする大規模な伽藍修理を行なった可能性が強い。瓦溜上の整地は修理後の粧い新たになった伽藍にともなうものであろう。しかし、整地土直上に天禄火災の焼土層が認められることは、大修理からそれほど時間を経ずに、新装伽藍の大半が灰燼に帰したことを示すのであろう。



第39図 薬師寺出土隅木蓋瓦